

私たちは真理でさえ偶像にしてしまう

ヴァンサン・キャロー

服 部 敬 弘 訳

真理と愛 (charité) [慈愛] の概念が『パンセ』のなかでどのような関係にあるかを全体的に論じることは、本講演の諸制約を超えることになってしまう。そのため、私は、一つの問いについて概略的に論じることしかできない。この問いは、以下の複数の理由から困難であるとみなされている。第一の困難としては、パスカルが、確実性としての真理というデカルトの概念と関連させながら、真理¹⁾ということは何を理解しているかを描き出すことがまず必要だからである。ハイデガーは、『ニーチェ』において、真理²⁾から確実性³⁾へ (veritas から certitudo へ) の根本的変動を分析し、「存在と真理が、表象されてあることと確実性という意味へと本質的に変化したことを、その内的な全射程にわたって見極め」ようとしていた。彼がこのとき正しく理解していたように、パスカルは、デカルトにおける確実性としての真理という新たな規定を忘れることなく、近代に特徴的な「人間の支配の座」⁴⁾をキリスト教へと統合した最初の人である。真理が確実性となったということ、すなわち、真理自体が真理についての認識へと従属したということは、「真理の確実性」⁵⁾という特筆すべき——それは決して冗語ではない——表現が、十分に示唆——たとえそれが示唆にとどまっているとしても——していることである。パスカルにとって、厳密な意味で捉えられた確実性を参照することは⁶⁾、信仰に立ち戻ることだろう。それは、『メモリアル』においてパスカルが、神への接近、すなわちまさ

に真理として理解された神への接近を浮き彫りにするための言葉を意味深に繰り返すことによって、印象的な仕方ですべていたことである⁶⁾。

この第一の困難から次に求められるのは、『パンセ』において、この新たな真理概念が、より一般的な用法——例えば、「宗教の真理」という表現、それぞれの真理には対立する真理が対応するというテーゼ、さらに真理への嫌悪としての自己愛の分析など、こうした場合に見られる一般的な用法⁷⁾——は措くとして、どのようにして真理を一つの領域とみなしているのか⁸⁾、あるいはこの新たな真理概念が、どのようにして（デカルト的な）テーゼ——「われわれには、どんな懷疑論も打ち破ることのできない真理の観念がある」⁹⁾——を、「真理と正義」¹⁰⁾との関係に基づいて考察しているかについて検討することである。もちろん、『パンセ』において「(諸) 真理 vérité(s)」という語が 200 回以上使われていることから¹¹⁾、網羅的にこの検討を行うことはほぼ不可能だろう。たとえ、パスカルの真理概念についての本格的な調査にとってこの作業がどれほど必要なものであったとしてもそうである¹²⁾。

第二の難題は、アナロジーを用いた研究から出発して、愛 (charité) 概念を¹³⁾、真理の問いへと関連づけることによって解明することである。真理が第二の秩序の特徴であるなら、愛は第三の秩序を規定するのだ、とする立場に立ちうると考え、「物事の三つの秩序 (ordre) [次元]」のなかに、真理と愛との関係をめぐる問いに対する、パスカルの最も明瞭な回答、さらには最終的な回答なるものを見いだせるとみなす論者もいる¹⁴⁾。とはいえ、ここでは次の点を問うだけで十分だろう。第一に、なぜパスカルが、「物事の三つの秩序」¹⁵⁾のなかで真理概念については表立って取り上げなかったのか。第二に、好奇心と叡知、あるいは学問と聖性のうち、いずれが真理と結びつけられているのか。第三に、そのうちのいずれかがたどりつくのは、どのような真理——ただし真理とは名づけられていないが

——なのか。こう問うのは、答え——仮に答えがあるとすればだが——が見かけほど単純ではないはずだということを理解するためである¹⁶⁾。

第三の困難は、護教論的企図全体にまつわる困難だが、それは、パスカルが、実際には真理と愛との関係をそれ自体で論じることを決して目標にすることはなかったという点にある。結局、パスカルが、(明らかに「真理の研究」¹⁷⁾にかかわる)『幾何学的精神について』のなかで適用したデカルトの方法論と、仲保者キリストをめぐる考察に集中するキリスト論とを、一つの共通の問いへと主題的に統合している、ということを含意するような〔文献上の〕内的必然性はどこにもないのである。こうした問いは、それが有している「哲学的な」性格から、一層体系的な仕方提起されているとしても、この問いを立てること自体、イソステネイア〔相拮抗する二つの論を並置して判断保留へ導く古代懐疑論の手法〕にとっては格好の対象であっても、おそらくパスカルにとってはまったく関係のないものであった。したがって、パスカルの問いではなかったような問いを『パンセ』に投影するのは控えたい。

そうすると、『パンセ』で「真理」と「愛 (amour)」とが共通して用いられているところを探し求めても、それがほとんど見つからないことに、人はおそらく驚くことになるだろう。パスカルの言葉のなかで目にする「真理への愛 (l'amour de la vérité)」という表現は、たった2度用いられるだけである。一つは、〔信仰宣誓書への〕署名問題をめぐる『プロヴァンシアル』の準備メモのなかであり¹⁸⁾、もう一つは、カトリック教会によるイエズス会士らへの対応に関するメモのなかである¹⁹⁾。なお、この対応については『パリの司祭たちの第六文書』でも再び取り上げられる。したがって、真理と愛 (amour) とのあいだの関係に関する全般的の研究にとって、これら2度の使用よりも決定的なものは、次の論争的な使用箇所である。というのも、そこでは真理がまさに真理の場としての教会を指してい

るからである。「教会の歴史はまさしく真理の歴史と呼ばれなければならない」²⁰⁾。さらに「真理を愛さない者は、その口実として、それに異議が唱えられ、それを否認する者が多数にのぼることを言い立てる。こうして彼らの誤りは、彼らが真理あるいは愛 (*charité*) を大切にしないことだけに由来する」²¹⁾。真理あるいは愛とは、両者の永続性の場としての教会である。以上の文言をその文脈から切り離すことはできないし、また、真理を愛することは教会を愛することであって逆もまた真なり、というこの闘争的な主張とこれらの文言とを切り離すこともできないだろう。これらの文言はいずれも、それ自体で真理と愛についての根本的な考察を行っているわけではない。たとえこれらの文言が、おそらくはパスカルにとって次の文を改めて述べるきっかけになっていたとしてもそうである。なお、次の文は、当時の抗しがたい頹廢的状况から生じている点が忘れられているために、議論の余地がないと思われるものである。「真理がこれほど隠匿され (*obscurcie*)、虚偽 (*mensonge*) がこれほど確立した現今、真理は愛することなしには知ることができない」²²⁾。

私たちは愛を通してはじめて真理へ入る

以上のような真理の認識に必要な条件——すなわち、真理を愛すること——について、パスカルは、すでに『説得術について (*L'art de persuader*)』のなかで指摘している。そこで、アウグスティヌスの格言（「人ハ愛カラデナケレバ真理ニ入ラナイ (*Non intratur in veritatem nisi per caritatem*)」)²³⁾を引用している。アウグスティヌスは、聖霊こそ人間を真理へと導くということを論証するために、この格言を前提として用いている²⁴⁾。「私たちは愛 (*charité*) を通ってはじめて真理に入る」。しかしながら、ハイデガーの『存在と時間』第29節で引用された、この『説得術に

ついて』の有名な一節が、独立で意味をもちうるかは疑問である。独立で、というのは、パスカルがそれを述べている文脈から離れて、ということである。そこでパスカルは、説得術から神の真理を除外しているのである²⁵⁾。というのも、愛が認識の条件であるというテーゼが意味をもつのは、神の真理に対してのみであるはずであって、またそのテーゼは、次のことが問題となることを理解するためだけに正当化されるものだからである。すなわち、「自然の事柄によって人間にとって自然であるはずだった秩序とはまったく反するものとして確立された〔・・・〕超自然の秩序」である。「自然であるはずだった」のだが、実際にはそうではなくなった。「というのも、われわれ人間は、実際には自分にとって快いことしかほぼ (presque) 信じないからである」²⁶⁾。自然の秩序は知性に優位を与えてきたが、原罪による堕落を通じて逆転する。その結果、「意見が受け入れられる」入り方のうち、「最も普通」の入り方は、より自然ではないほうから入ること、すなわち、意志〔意欲〕から入るほうである²⁷⁾。したがって、聖なる事柄固有の秩序から見れば自然ないし世俗的な事柄を、意志に同意する力を与えることで、取り扱うことが²⁸⁾、罪の結果としてもたらされる。

しかし、どうして神は、聖なる事柄のための超自然的秩序を、かつてのあるべき秩序とはまったく反対の秩序として確立したのだろうか。それはまるで、神が、自ら最初に確立した自然の秩序からは堕落した状態——それは「劣ったもので、価値が低く、真理とは無縁」²⁹⁾の道であり、知性を意志へと従属させる道である³⁰⁾——を、秩序のモデル——それによって人は神の真理に同意しなければならない——とみなしていたかのようである。それはまるで、神が、快く受け入れる術 (art d'agr  er) 〔気に入られる術〕に基づいて、魂のなかに神の真理を据えたかのようである³¹⁾。パスカルの説明によれば、それは実際、耳に快いこと (choses agr  ables) を語

るようモーセに懇願するユダヤ人たちを罰するためである³²⁾——「まるで快適かどうかによって信じるかどうかが決まるはずだといわんばかりに」——「神は、意志を魅惑し導くまったく天上的な心地よさによって、意志の反抗を屈服させてからはじめて、精神のなかに光を注いで下さるのである」³³⁾。

この神の罰は逆説的である——「こうした〔ユダヤ人たちの〕無秩序を罰しようとするのは、ご自身にふさわしい秩序を通じて」である。というのも、この神の罰は、自然の秩序を逆転させるからである。その結果、快楽を与えるものが好まれ〔愛され〕、好まれるものが信じられる。これこそユダヤ教の転倒した原理であり、真理を快さ (agrément) へと従属させる原理であるが、それは、真理と快楽とを切り離すキリスト教とは反対の原理である。「その結果、われわれは、われわれの快楽と鋭く対立するキリスト教の真理を承認するところから遠く隔たってしまったのだ」³⁴⁾。言い換えれば、〔キリスト教の〕真理の方は、快楽を与えるものではなく、好ましい (aimable) ものでもない。以上のことから、(反-自然の秩序にしたがって³⁵⁾) 愛を通してはじめて真理へ入るという格言が当てはまるのは、(1) 神の真理に対してだけである³⁶⁾。それは (2) 罰の原理としては、ユダヤ人に対して当てはまり、また (3) 理性のへり下りの原理としては³⁷⁾、キリスト教徒——好ましくないもの (non-aimable)、つまり真理を愛することが彼らには求められる——をはじめとする、ユダヤ人以外の人々に対して当てはまる。

そこで提示されるのが、オウィディウスとアウグスティヌスとを対比する『説得術について』の交差法である。^{キアスム}「その結果、こういうことになる。人間に関わる事柄について語る際は、それを愛する前に知らなければならぬ」といい、そのことが諺にもなったが³⁸⁾、一方、反対に、神に関する事柄について語る際、聖人たちが語っているのは、それを知るには愛さなけ

ればならないし、私たちは愛を通してはじめて真理に入るということで、彼らはこのことを自らの最も有益な格言のひとつとしたのである」。一般的に見られる誤読に反して、ここで理解すべきは、真理へと至るのは、自然には（naturellement）好ましくない真理を愛する場合（したがって、それを知ったときからそれを愛するよう仕向けるはずの自然の秩序が逆転したとき）だけだ、ということである。まさに真理はわれわれには快くないからこそ——真理は自然には好ましくないからこそ——、真理に入るためには、私が真理を愛さなければ（愛そうとしなければ）ならないのである。

したがって、愛を通してはじめて真理に入るとことは、パスカルにおいては、際立って逆説的な性格を帯びることになる。それがへり下りの原理の結果であることを把握したときにはじめて、われわれはこの性格について理解するだろう。真理を知らないから、真理に入らないのではない。真理を愛していないから、真理に入らないのである³⁹⁾。それゆえ、真理に入るためには、私は真理を愛さなければならない。つまり、私は真理を真に知らなければならないのである。

似像としての真理

以上の論述が果たした役割は、何よりも真理と愛との関係——さらには『説得術について』内の両者に基づくテーゼ——にかかわる諸困難の所在を明示することである。この困難は、本論の主題である、次の考え方——この考え方も〔先の格言同様〕明らかに問題含みなのだが——に集約されている困難でもある。「私たちは真理でさえ偶像にしてしまう。実際、愛（charité）から切り離された真理は神ではなく、それに似せた像、つまり一つの偶像であり、それを愛したり崇めたりしてはならない」⁴⁰⁾。

簡単に言うと、当該の逆説は次の通りである。神が真理であるなら（それがパスカルの考えていたことだが³⁴¹⁾）、どのようにして私たちは真理を偶像にしてしまうのだろうか。というのも、それは、いわば神でさえ偶像にしてしまうということであり、神でさえ、その真理を指す固有名において、偶像とみなしてしまうということだからである。この逆説は、歴史的に捉えるなら、次のように表すことができる。パスカルはどのようにして神と真理、すなわち愛と真理とを分離するに至ったのか。なぜなら、パウロやアウグスティヌスをはじめとするキリスト教の伝統では、愛と真理とを、必然的で本質的な紐帯として思考してきたからである。以上の逆説から、次の複数の困難が生じることになる。

(1) 愛から離れた真理とは何か。それを例証するものはあるだろうか。愛から離れた真理は、例えば自然学で、確かなもの (vrai)、と呼ばれるものだ、と仮定することもできるかもしれない。デカルトの自然学は確かである、しかし真理そのものという点では無用である。それは、「一時間でも時間を費やす」⁴²⁾ 価値があるとは思えない。自然の認識は、救済には無用である。たとえ仮に自然の認識が「真である (véritable)」としても——実際そうなのだが——、人間がそこに見出すのは「へり下る大いなる主体」だけである。したがって、この仮定は〔当該の断章で〕提示された後、即座に退けられる。なぜなら、誰も、科学的〔学問的〕真理を崇めることはないからである。むしろパスカルが強調するように、科学的真理によってわれわれはへり下るのである。

(2) 真理というこの似^{イマージュ}せた像は、「愛することも崇めることもあつてはならない」偶像であることが示される。真理は、神の偶像であることなしには、神の似像ではありえないのだろうか。偶像を愛してはならないということは容易に理解される。しかし、なぜ真理を愛してはならないのだろうか。むしろ、真理は何よりもまず愛さなければならないものではないだ

ろうか。パスカルは、〈真理への愛〉としての哲学を拒絶することによって、「真理を愛さなければならない」というキリスト教の不変の言説を無効にしているだろうか。

(3) より踏み込んで問うなら、真理を^{イマージュ}似像とみなすことは何を意味するのだろうか。およそ、つまりは中世から16世紀まで、神学者たちはまさに^{イマージュ}似像と真理とを区別し、前者を後者に従属させてきた⁴³⁾。〔にもかかわらず〕どうして真理それ自体が^{イマージュ}似像なのだろうか。また、それは何の^{イマージュ}似像なのだろうか。

この問いに答えるためには、つまりは真理が^{イマージュ}似像でありうることを、より正確には似せた像——したがって偶像——でしかありえないことを理解するためには、パスカルにとって^{イマージュ}似像とは何であったかを明らかにしておく必要がある。なぜなら、パスカルには、^{イマージュ}似像〔比喩像〕、ないしは表徴^{フィギュール}(figure)〔象徴・形象〕をめぐる真の理論が存在するからである。それは、^イ図^マ像^{ージュ}原理 (principe iconique) に基づいているが⁴⁴⁾、エマニュエル・マルテイノの論考が指摘する通り、パスカルはたえずこの原理の正しさを認めていたのである⁴⁴⁾。しかし、本講演でパスカルの^{イマージュ}似像論⁴⁵⁾について説明する時間はないので、ここからは、「欺く^{イマージュ}姿 (fausse image)」という驚くべき概念から出発して、この^{イマージュ}似像を論じることにとどめたい。

自然という欺く姿

周知の通り、パスカルにとっては、自然が^{イマージュ}似像、つまり^{イマージュ}恩寵の^{イマージュ}似像〔恩寵を象ったもの・恩寵を映す影〕であるだけでなく⁴⁶⁾、自然は「おのれの^{イマージュ}似像を〔・・・〕万物のうちに刻み込んだ」⁴⁷⁾。要するに、パスカルの書簡『父パスカルの死』が示している通り、自然は想像する (imaginer) 力であり、つまりは^{イマージュ}像を喚起する、より正確には、自然は文字通

り、われわれの眼前に像イマージュを提示するのである。この〔自然の〕眩惑メカニスムする (troubler) 力について詳しく見ておこう。

1651年10月17日に妹と姉婿宛に書かれた書簡『父パスカルの死』は、二つの部分からなっている。前者は、「苦しみのさなかにあってもそのことを考えられるだけの自由な精神をおもちの方には、非常に慰めとなる話」である。「そのこと」とは、キリスト者たるもの、〔父〕エティエンヌ・パスカルのキリスト者としての死を怖れてはならず、それを喜ばなければならないという「大前提」である⁴⁸⁾。この慰めとなる話は、「犠牲」についての小論となっており、キリストの生と死によって開かれた真理ヴァリテから出発して、「キリスト者の生」を、「死によってのみ完成しうる、絶え間のない犠牲〔献身〕」⁴⁹⁾とみなすものである。したがって、この話は、「イエス・キリストにおいて死を考える」⁵⁰⁾ことになるはずである。この第一部を終える際にパスカルは次のように述べる。「これこそ、私たちの崇高なる主における事態であります」。

第二部は、この事態を「私たちににおいて」⁵¹⁾考えることである。そうするには、すなわち、異教徒としてではなく、キリスト者として死んだ父について考えるには、父が、彼の隣人たちのため（そしてより広くは世界のため）に「失われた」のは、父の死の瞬間ではなく、父の洗礼の時点からであると考えなければならない。父の死は、「罪から完全に解放された」瞬間である限りにおいて、「神が父に果たすようにとお与えになった仕事」の仕上げにほかならない。死において「父の意志は神のうちに吸収される」のだが、この死は、父の洗礼及びその生と一体なのである。パスカルは次のように述べている。「神が結びつけられたものを、私たちの意志で引き離すことのないようにいたしましょう。そしてこの真理ヴァリテの理解を通じて、腐敗し、偽る自然の感情を押し殺すか、あるいは和らげるようにいたしましょう。この腐敗し、偽る自然は諸々の欺く姿 (fausses images)〔虚

像・似ても似つかぬ姿] しかもたず、しかもその幻影によって、真理と福音書が私たちに与えるはずの神聖な感情を眩惑しているのですから」(強調は引用者)。したがって、真理を眩惑する諸々の欺く姿は自然に帰せられる。では、これらの欺く姿^{イマージュ}とは何か。そのうちで最初に登場する姿^{イマージュ}は、死者の身体を腐敗した肉とみなすよう仕向ける姿^{イマージュ}である。「身体をもはや悪臭を放つ腐敗した肉のように見ないようにしよう。というのも、見せかけの自然が身体をそのように象っている (figurer)⁵²⁾からです」。目の前で朽ちていく身体は、欺く姿^{イマージュ}である。それを別の姿^{イマージュ}、すなわち霊の宿る神殿としての身体という姿^{イマージュ}に置き換えなければならない。すなわち、それを「信仰の教えるように、聖霊の宿る犯しがたい、永遠の神殿として考えることにいたしましょう」⁵³⁾。腐敗した肉は欺く姿^{イマージュ}を表しており、神殿が正しく解釈された姿^{イマージュ} (image vraie) である⁵⁴⁾。

自然と真理との対立についてさらに追跡するとき、パスカルは、別の欺く思惟を数え上げながら、それに代わる次の思惟を示唆している⁵⁵⁾。死は、生の終焉ではなく、生の開始である、とか、魂は「無へと帰したり滅びてしまった」ものではなく、「生ける至高の存在者に結びつき、生を与えられている」ものである、とかである。パスカルは、こうした〔死の捉え方を〕変えることを、正すこととみなし、非常にデカルト的な仕方で、真理への注意を要求するものと考えている⁵⁶⁾。なぜなら、真理は、「私たちに深く刻まれた間違った感情 (sentiment d'erreur)」を正してくれるからである。第一の間違った感情は、腐敗した肉や死を前に抱く恐怖の感情である⁵⁷⁾——この恐怖は、きわめて自然な恐怖であり、パスカルは続いて、その「源泉」について、二つの愛をめぐるアウグスティヌスの学説に基づいて分析している⁵⁸⁾。なぜなら、死こそ、自然に (naturellement) 恐ろしいものだからである⁵⁹⁾。つまり、死は自然に、すなわち「無垢の状態においては」恐ろしいものであった。そして、「死が、神の意志に適った生を

終わらせたとき」(なぜなら、神の意志に適った生は死をもたらすことはないからである)⁶⁰⁾、死が恐ろしいものとみなされていたのは正しかった。しかし、罪以来、すなわち生が「墮落」して以来、死への恐怖がわれわれに残ってしまった。まさにそのとき、生が不正になったのである(というのも、死が正しくなったからである)。「死が聖なる魂を聖なる身体から分かつときに、死を憎むのは正しいことでした。[・・・] 死が聖なる魂を不純な身体から分かつときには、死を愛するのが正しいことなのです」⁶¹⁾。われわれは恐怖の感情を(死へと不十分な仕方で結びつけることで)残したのに対して、正しさの感情については失ってしまった。したがって、[死への] 恐怖が生じるのは欺く^{イマージュ} 姿 からであり、つまりは死者の身体を腐敗した肉に見せる欺く^{イマージュ} 姿 からである。まさしく恐怖はこの欺く^{イマージュ} 姿 の結果であって、間違った状態にある 姿 の結果である。

この「欺く^{イマージュ} 姿」の最初の登場から何を結論できるだろうか。以下の三点を指摘しておこう。

(1) 死者の身体そのものが、「像」という身分をもっている。パスカルは、身体という 像^{イマージュ} については取り上げず、死者の身体を 像^{イマージュ} として取り上げている。「考える手足」における愛(amour)の統一について考えることが問題になる際、パスカルは、別のさらに決定的な仕方、人間身体の 像^{イマージュ} について改めて取り上げることになる。なお、この 像^{イマージュ} を真の似像^{イマージュ} (vraie image) たらしめるものは何かについては後述する⁶²⁾。

(2) 死者の身体という 像^{イマージュ} は、誤って解釈される(faux)こともあれば、正しく解釈される(vrai)こともありうる。身体について、自然に目に映るもの、(不正な仕方)で恐怖を引き起こすものに基づいてこの身体を考えるときには、つまりそれが腐敗した肉に見えるなら、この 像^{イマージュ} は誤って解釈されている。目に映るものにしか目を向けない限り、その 像^{イマージュ} は欺く^{イマージュ} のである。この(自然の) 像^{イマージュ} は、われわれが自然、あるいは場合によつ

ては実在と呼ぶものである。自分自身にしか目を向けさせない自然は、欺イマージュく像しか見せることができない。自然主義——自分自身しか理解させない自然の秩序——は欺瞞 (faux) である。

(3) パスカルは、写イマージュしとオリジナル、影イマージュ像と真実在という二項対立を問題にしているのではない。彼は、像イマージュについて、プラトンの仕方⁶³⁾、つまり存在の劣った段階、存在の秩序における低次の段階として考えることに関心はない。エマニュエル・マルティノが指摘する通り、「パスカルは決してプラトン主義的ではなく」⁶⁴⁾、むしろ欺イマージュく像イマージュを暴イマージュきうるものは何かを理解するために、似イマージュ像イマージュを欺イマージュく像イマージュたらしめているものは何かということとを問題にしているのである。ところで、欺イマージュく像イマージュ (fausse image) は、まず誤って解釈された像イマージュ (image fausse)、すなわち〔像に関する〕解釈上の間違い——それによって間違っイマージュて、自然は象られた通りに (figurativement) 解釈されなければならないと理解してしまう——である。この間違いを正すことができるのは真理だけであり、このことによって、誤って解釈された像イマージュを、正しく解釈された像イマージュ (image vraie)、つまり自然に目に見えるわけではないものについての比イマージュ喩イマージュ像イマージュへと置き換えることになるのである。この正しく解釈された比イマージュ喩イマージュ像イマージュこそ、神殿〔教会〕としての身体である。イマージュとは、オリジナルに対するコピー〔という意味〕ではない。朽ちていく死体は、栄光の身体のコピーではない。信仰において捉えられた死者の身体は、自然には永遠に理解不可能な表徴化 (figuration) に基づいて、つまり、恩寵の秩序へと移行することで、自然には不可視であり続けるものを（それが霊の神殿であることを）表徴する〔象徴として表す〕。正しく解釈された比イマージュ喩イマージュ像イマージュがその比イマージュ喩イマージュであるところのものは、見えないものに属している。この見えないものがあるからこそ、正しく解釈された比イマージュ喩イマージュ像イマージュ (image vraie) は、真イマージュの似イマージュ像イマージュ (vraie image)、すなわち比イマージュ喩イマージュという機能を果たす像イマージュと言える⁶⁵⁾。また、この見えないものがあるからこ

そ、誤って解釈された像 (image fausse) は、^{イマージュ} 比喩という機能を果たさない欺く^{イマージュ} 像 (fausse image), 表徴しない〔象徴として機能しない〕欺く^{イマージュ} 像^{イマージュ} と言えるのである。そのことを頻繁に繰り返しながら考えるべきだとパスカルは言う。「神は目に見えるもののなかに、目に見えないものをお示しになりました。これはとても普遍的で有益な思想なので、この思想を注意深く考えずに長く時を過ごすべきではありません」⁶⁶。したがって、この思想を考えることにしよう。そしてわれわれの考えを展開することにしよう。実際、人間の社会は、欺く^{イマージュ} 比喩に基づいてはいないだろうか。

愛から離れた真理

確かにパスカルは、『父パスカルの死』で用いられた欺く^{イマージュ} 姿という概念について、後に再び取り組んでいる。例えば、彼は、邪欲〔欲心〕(concupiscence) に関して、それが「愛について欺く^{イマージュ} 比喩」⁶⁷でしかないと述べることになるのである。どのような点で、邪欲が愛を表す^{イマージュ} 比喩〔愛と似たもの〕なのだろうか。「人々は邪欲を基礎として、統治と道徳と正義の素晴らしい規則を引き出してきた」という点で、つまりそれはわれわれの意志的行為の「源泉」であるという点で⁶⁸、しかもそれを公共の利益に役立たせようとしたという点でそうである。つまり、人間の社会は、この邪欲に基づいているという点で、邪欲は愛を表す^{イマージュ} 比喩なのである。しかし、どのような点で邪欲は愛について欺く^{イマージュ} 比喩〔愛とは似ても似つかぬもの〕と言えるのだろうか。それは、「実のところ、邪欲は憎しみに過ぎ」ず、愛ではないという点である。というのも、「人間はすべて自然に〔改めて強調しておこう〕互いに憎しみあっている。人々は可能な限り、人間の邪欲を利用して公共の利益に役立たせようとした。しかし、それは装うこと

(feindre) [作り事] であって、愛について欺く^{イマージュ}比喩にすぎない。実のところ、それは憎しみにすぎない」からである。さらに、「人々は邪欲を基礎として、そこから統治と道徳と正義の素晴らしい規則を引き出した。しかし、結局のところ、人間のこの邪悪な基礎、この『悪しき形姿 [表象] (figmentum malum)』⁶⁹⁾はただ覆われているだけで、取り除かれてはいない」。邪欲が誤って解釈された^{イマージュ}比喩 [悪しき形姿] であるのは、邪欲はそれ自体で、自分がその^{イマージュ}比喩であるところのもの [愛] とは反対だからである。社会の土台にある諸利害の世俗的な結びつきに規則を与える邪欲は、それが不正で憎しみにすぎないにもかかわらず、正義の規則として表に現れる。それは死せるキリスト者の身体が、霊の神殿であるにもかかわらず、腐敗した肉として表に現れるのと同じである。こうした誤って解釈された^{イマージュ}比喩である邪欲が欺く^{イマージュ}比喩であるのは、邪欲が人間の基礎である憎しみに覆い^{イマージュ}をかけているからであり、パスカルの言うように、邪欲はこの基礎を^{イマージュ}覆わ^{イマージュ}にして人間からその基礎を除去して取り去ることはないからである。そのことをすでにパスカルは、^{オネットム}紳士 (honnête homme) に反対して同様の対立を示すべく「憎むべき〈私〉」について語ったときに指摘している。「〈私〉とは憎むべきものだ。ミトン君、きみはそれに覆い^{イマージュ}をかけているが、だからといって、それを取り去ってはいない、だから君はやはり憎むべきものだ」。ここには^{オネットム}紳士 [誠実な人間] の誠実さ (honnêteté) という^{イマージュ}欺く^{イマージュ}比喩が描かれていることを付言しておこう。義務から行為する (「迷惑になることは控える」) ことは、好ましき (amabilité) を表す^{イマージュ}比喩ではある。しかしそれは好ましきについて欺く^{イマージュ}比喩である。なぜなら、それは結局、〈私〉を「不正な人々にとって好ましい (aimable)」存在にする「不正」^{イマージュ}70) でしかないからである。誤って解釈された^{イマージュ}比喩が覆い^{イマージュ}を取ることなく、むしろ覆い^{イマージュ}をかけ、隠して隠蔽するがゆえに、誤って解釈された^{イマージュ}比喩は欺く^{イマージュ}比喩となるのである。

それに対して、正しく解釈された^{イマージュ}比喩 (image vraie) は、見えないもの
 につけられた覆いを取る。それによって、^{イマージュ}比喩像は、^{イマージュ}比喩の機能を果た
 す^{イマージュ}真の似像 (vraie image) となる。それは、パスカルが、例えば『ポー
 ル・ロワイヤル講演』で確実に展開したような表徴論において、彼がしば
 しば^{フィギュール}「表徴」(figure)〔象徴・喩え・形象・予型〕と呼ぶものである。パ
 スカルが検討した他のいくつかの例のうちで、「^{イマージュ}贖いの比喩像としての紅
 海」⁷¹⁾というのもその一つである。旧約聖書に見られる^{フィギュール}「表徴」は『パン
 セ』のファイル「律法は表徴的であった」のなかで枚挙されるが、それを
 通じてパスカルは、表徴が表徴するところのものと表徴自身との関係を分
 析している。これは新約聖書の神秘でもある。パスカルはパウロを引用
 し、次のように述べる。「これらすべてのことは^{フィギュール}表徴〔警告・予型〕とし
 て起こった」⁷²⁾。次に自分の考えを次のような特筆すべき文言にまとめて
 いる。「愛に至らないものは、すべて^{フィギュール}表徴〔形象〕である」(つまり、愛
^{フィギュール}の表徴である)。さらに「聖書の唯一の目標は、愛である。唯一の善に至
 らないものは、すべてその^{フィギュール}表徴である。実際、目的は一つしかないのだから、
 文字どおりの言葉遣いでそこに至らないものは、すべて^{フィギュール}表徴であ
 る」⁷³⁾。

以上を要約しておこう。

- a) 恩寵の神秘は、パスカルが「愛という唯一の掟」⁷⁴⁾と呼ぶものに從って
 いる。というのも、この神秘は愛へと至るからであり、愛は^{フィギュール}「表徴〔形
 象〕の掟ではない」⁷⁵⁾からである。それはむしろ「実在」⁷⁶⁾である。
- b) 「表徴的なもの (chose figurante)」が、それが表徴しているものとして
 認識されたとき、つまりは——まさにそれだけを受愛することが重要である
 ところの——「表徴となられた」もの (choses figurées) として認識された
 とき、この表徴的なものはまさに^{フィギュール}予型なのである。それは^{イマージュ}真の似像につい
 ても同様である⁷⁷⁾。こうしてパスカルは、われわれの関心を惹く表徴の複

数性についての理論を築く。「愛という唯一の掟」がある。それに「神は〔・・・〕多様に語り、私たちの好奇心を満足させられる。好奇心は多様性を求めるので、私たちは唯一の必要なものに常に導くこの多様性を利用されるのである」⁷⁸⁾。

c)「表徴的なもの」が、その表徴化の機能において誤認されたとき、またそこで足を止めてしまったとき、それは欺く^{イマージュ}比喩である。

これまで見てきた通り、誤って解釈された^{イマージュ}比喩とは、それが覆いを取り去るよりもむしろ、覆いをかけ、隠し、隠蔽するがゆえに欺く^{イマージュ}比喩であった。さらに、欺く^{イマージュ}比喩は、それがその^{イマージュ}比喩であるところのものとは反対のものである。紳士が誤って解釈された^{イマージュ}比喩だけでなく、〈私〉について欺く^{イマージュ}比喩をも与えるのは、紳士が、〈私〉を「憎むべき」ものであるにもかかわらず「好ましい」ものとみなすからである。欺く^{イマージュ}比喩は、それがその^{イマージュ}比喩であるところのものとは反対のものを表に現す。これこそ、邪欲だけでなく、愛について欺く^{イマージュ}比喩である貪欲 (cupidité) によっても示されていることである。「人間の意志には二つの原理がある。貪欲〔貪愛〕と愛〔慈愛〕である」。パスカルは、自身の分析を次の交差法で締め括っている。「貪欲は神を用いて (user) 現世を享受し (jouir), 愛はその逆を行う」⁷⁹⁾。したがって、「貪欲ほど愛に似たものはなく、また貪欲ほど愛に反するものもない」⁸⁰⁾。貪欲は、それが富への欲望であるという点で愛に似たものなので、貪欲は愛の^{イマージュ}比喩〔似像〕といえる。ただし、貪欲が地上の富へと関係づけられる限りで、貪欲は愛について誤って解釈された^{イマージュ}比喩〔愛に似ていると誤解したもの〕である (富の約束の意味を取り違えた誤謬)。さらに貪欲は神を享受することなく神を用いる限りで、貪欲は欺く^{イマージュ}比喩〔愛とは似ても似つかぬもの〕である。

私たちは真理でさえ偶像にしてしまう

パスカルイマージュの似像論の基本的要素は明らかになったので、ここから次の逆説的命題「私たちは真理でさえ偶像にしてしまう」へと向かおう。

「改悛の神秘」と題されたマルティノ版『パンセ』の中でエマニュエル・マルティノが再構成した束が完全に示しているように、パスカルは、『ローマの信徒への手紙』について、まずその1章（「正しい者は信仰によって生きる」⁸¹⁾）、次に3章（律法と恩寵⁸²⁾）について論じ、そして再び1章のなかの次の有名な20節について論じている。「世界が造られたときから、神の目に見えない性質は被造物に知解を通して示されています（*Invisibilia enim ipsius, a creatura mundi, per ea quae facta sunt, intellecta, conspiciuntur*）」。イマージュサシ訳の聖書では、パスカルにならって、「完璧さ（*perfections*）」という言葉が使われている。「世界の創造以来、〔・・・〕神の目に見えない完璧さが、被造物がそれについて行う理解（*connaissance*）を通して現れています」。パスカルはこの一節を自由に——とはいえ恣意的ではなく——読み替えている。「自然 [*quae facta sunt*, 造られたもの全体] に完璧さがあるのは、それが神の似像 イマージュ [*intellecta*] [神について知解されたもの] であることを示す [*conspiciuntur*] ためである」⁸³⁾。「完璧さ」を〔聖書の文言に〕加えても何ら問題ではない。フランス語では *invisibilia* [目に見えない] という形容詞に付く名詞が必要だが、パスカルは明らかに〔その名詞として〕「もの (*choses*)」を使うのを避けようとしていたからである。それに対して、結果的に〔当該の断章で言及される〕「欠陥」に対するパスカルの批判がなされることになるだろう。ここで イマージュ *intellecta* を「似像」[知解されたもの] とする選択は決して些細な論争点ではない。というのも、パスカルは、われわれが理解すべき決定的概念をこ

こで導入しているからである。われわれは、世界の創造以来造られたものを、それについてわれわれがもっている^{イマージュ}似像〔知解内容〕を通してはじめて知解する（*intelliger*）〔ラテン語 *intellego* に基づくフランス語動詞〕のである。「われわれは知解する」と言うよりはむしろ、*lego*〔集める〕（*intellego*=*inter-lego*〔知解する=中に-集める〕）という意味に合わせて、「われわれは眼を通して集める」^{イマージュ}⁸⁴、つまり^{イマージュ}像を介して集める、と言うべきだろう。したがって、パスカルがここで^{イマージュ}似像の概念を導入したことには根拠がある。なぜなら、パスカルが〔先の断章で〕訳したパウロは次のように述べるからである。「自然に完璧さがあるのは、自然が神の^{イマージュ}似像であることを示すためである」。パスカルはこの文言に続けて次のように述べる。「〔・・・・〕自然に欠陥があるのは、自然が神の^{イマージュ}比喩像にすぎないことを示すためである」。自然は神の^{イマージュ}似像であり、^{イマージュ}比喩像にすぎない。したがって自然は、両義的な身分、すなわち（その完璧さゆえに）判明〔非隠匿的〕である（*clair*）と同時に、（その欠陥ゆえに）隠匿的な（*obscur*）身分をもっている。自然は、判明であると同時に隠匿的であるがゆえに、それは神を顕すと同時に隠すのである。パスカルがロアネーズ嬢に宛てた手紙では、次のように述べられている。神が「神を覆い隠す自然の秘密から出られるのは、私たちの信仰を促すため〔・・・・〕にほかならないからです。仮に神がたえず人間に現れるとすれば、神を信じることに何の^{イマージュ}功德（*mérite*）もなくなってしまうでしょう〔・・・・〕。神は自然の覆いのもとに隠れたままなのです」⁸⁵。この功德を引き立たせてみよう。この功德全体は、自然の不完全な〔判明性と隠匿性のうちの片方の〕隠匿性（*demi-obscurité*）に存している。われわれの功德をより大きくしようとして、われわれは、この隠匿性が全面にわたる〔判明性すら覆う〕ことを望むかもしれない。だからこそ、「神の思し召しで不完全な隠匿性〔闇〕の状態（*état à demi-obscur*）に置かれると」、この状態が「私の気に触る」のであ

る〔表題の断章の一節〕。〔神の秩序を離れて〕私だけで判断したときには、神を認識する功德が、不完全な隠匿性のなかよりも、〔完全な〕隠匿性のなかにあるのだろう〔とってしまう〕からである。これこそまさしく、当該の断章の後半部でパスカルが告発していることである⁸⁶⁾。そこでは次のように結論されている。「これこそ欠陥であり、私が神の秩序から切り離された隠匿性を、偶像としていることのしるしである。ところで、何であれ神の秩序においてしか崇めてはならない」。なぜ私は〔完全な〕隠匿性を偶像にしてしまうのだろうか。それは、私が、そこで神を認識しようとするところの〔完全な〕隠匿性を、神の最良の似像 (image)〔神についての最良の知解〕とみなしてしまうからであり、つまりは、神自身が私に与えた神の比喩像イマージュ（それは不完全な隠匿性（にすぎないの）である）以上に大きな功德をもたらす似像イマージュとみなしてしまうからである。この〔完全な〕隠匿性において私は、神を、神の秩序から離れて崇敬しようとする。まさにこれこそ、偶像なのである。私が隠匿性を神の似像イマージュとして偶像化して崇敬するもの、それは神を誤って知解したもの (image fausse) である。これこそ偶像、すなわち、似ていると誤解した像イマージュ (image fausse) なのである⁸⁷⁾。

神を神の秩序から離れて崇敬することは、神について自分だけで判断してしまうことである。以上のことから、われわれは先の断章に続く断章へと導かれることになる⁸⁸⁾。それは、まさに功德に関する断章である。「人々は功德を作り出すことに慣れておらず、ただそれが作り出されているのを見て、それに報いることしかしない。彼らはこうして神を自分たちの尺度で判断する」⁸⁹⁾。神固有の秩序において功德を生み出すことができるのは、神だけである。しかも神が神固有の秩序においてこの功德を認めることができるのは、不完全な隠匿性においてのみなのである。

では、神について自分だけで判断するとはどういうことだろうか。それ

は、真理に基づいて神を判断すること、すなわち私が真理とみなすものの秩序のなかで神を判断することであり、まさに真理を言明する私の判断に基づいて神を判断することである。言い換えれば、それは、愛の秩序である神の秩序に則って判断することではなく、デカルトが言ったように、真理に則って (dans) 判断することである。したがって、逆説的にも問題となるのは、神の秩序から切り離された隠匿性であり、この意味での真理である。私はまさにこの真理を偶像にしてしまうからである。次の一節を改めて読んでおこう。「私たちは真理でさえ偶像にしてしまう。実際、愛から切り離された真理は神ではなく、それに似せた像^{イマージュ}、つまり一つの偶像であり、それを愛したり崇めたりしてはならない」。それは「完全な」隠匿性を愛したり崇めたりしてはならないのと同様である⁹⁰⁾。パスカルは次のように続けている。「それを愛したり崇めたりしてはならない。そしてなおさらその反対物、すなわち虚偽を愛したり崇めたりしてはならない」。それゆえ、パスカルは、真理に関する独創的な省察を行っていながらも、『ローマの信徒への手紙』に最も近いところにいたわけである。次の『『ローマの信徒への手紙』の』一節を強調するだけで十分だろう。「彼らは、神を知りながら、その栄光を神として称えることがない〔・・・〕。彼らは神の栄光を、〔・・・〕似せた像 (image) と取り替えたのです。〔・・・〕神の真理を虚偽に替えたのです」⁹¹⁾。

パスカルは、神が真理ではないと言っているのではない。パスカルによれば、神は、神の秩序のなかで、つまり愛の秩序のなかで真理なのである⁹²⁾。ところで、神が真理であると言うことは、真理が神であると言うことと同じではない。したがって、真理が神ではなく、真理は神の比喩像^{イマージュ}であり、神を表す一つの比喩でしかない。なぜなら、真理は、それだけでは、それ自体では、愛に至ることはないからである⁹³⁾。真理が、神の秩序——愛の秩序——から離れて、私に神について判断させるとき、しかも神

に基づいてではなく、自分だけに基づいて、つまり私の判断に基づいて判断させるとき、真理は、似ても似つかぬ像 (*fausse image*) ではありえず、むしろ似ていると誤解した像 (*image fausse*) でありうる、つまりは偶像となりうるのである。

注

- 1) «Der Wandel der Wahrheit zur Gewißheit», *Nietzsche*, GA, 6.2, pp. 383-391. [ハイデッガー 『ニーチェ II』 圓増治之, ボルガー・シュミット訳, 〈ハイデッガー全集〉第6-2巻, 創文社, 2004年, 399-407頁。] なお, この点に関してジル・オリヴォが以下で説明を試みている。Gilles Olivo, *Descartes et l'essence de la vérité*, Paris, PUF, 2005, section II, chap. V.
- 2) «[...] Müssen wir [...] den wesentlichen Wandel von Sein und Wahrheit im Sinne der Vorgestelltheit und Sicherheit in seiner vollen inneren Tragweite ermes-sen», «Der europäische Nihilismus», *Nietzsche*, GA, 6.2, p. 166. [『ニーチェ II』, 173頁。] さらに以下も参照。Nietzsche: *Der europäische Nihilismus*, GA 48, pp. 213-219 et 226-229. [ハイデッガー 『ニーチェ, ヨーロッパのニヒリズム』 蘭田宗人, ハンス・ブロッカルト訳, 〈ハイデッガー全集〉第48巻, 創文社, 1999年, 202-207頁及び213-215頁。]
- 3) «die neuzeitliche Herrschaftsstellung des Menschen», *Nietzsche*, GA, 6.2, p. 166. [『ニーチェ II』, 173頁。]
- 4) L 7/131 = *Disc.* 73. [パスカル 『パンセ』 (上) 塩川徹也訳, 岩波文庫, 147頁。] 「これらの原理が真理であるかどうか, いかなる確実性もない」。さらに以下も参照。L 14/189 = *Disc.* 81. [『パンセ』 (上), 229頁。] 「それらの真理が確実であること」。なお, 略号 *Disc.* は以下のテキスト [エマニュエル・マルティノ版 『パンセ』] を表す。Discours sur la religion et sur quelques autres sujets qui ont été trouvés après sa mort parmi ses papiers, restitués et publiés par Emmanuel Martineau, Paris, Fayard/Armand Colin, 1992.
- 5) パスカルは次の一節で, [デカルトの] 『省察』一 (*Meditatio* I, AT VII, 21, 17s.) を参照している。「人間が創造されたのは善なる神によるのか, 悪しき霊によるのか, それとも偶然によるのか, 信仰なしには分からないので [...]」(L 7/131 = *Disc.* 73 [パスカル 『パンセ』 (上), 147頁])。
- 6) 「確実性, 喜び, 確実性, 直感, 直観, (平和), 喜び」(*Disc.* 31 = OC III, 51.) [パスカル 『メモリアル』 塩川徹也訳, 『パンセ』 (下) 所収, 岩波文庫, 2016年, 27頁注(5)。] なお, 岩波版で指示されている「羊皮紙」の訳

のなかに「(平和)」はない。

- 7) 各用法については以下を参照。L XXIII/576 = *Disc.* 47, L HC 2/978 = *Disc.* 40-41.
- 8) L 2/21 = *Disc.* 116: 「真の場所と言えるのは、不可分の一点しかない。
[・・・] 絵画の技術では、遠近法がその点を定める。だが真理と道德では、
何がそれを定めるのか。」〔『パンセ』(上), 46 頁。〕
- 9) L I/406 = *Disc.* 74.
- 10) 「一本の子午線が正義〔真理〕を左右する」, 「ピレネー山脈のこちら側では
真理」など。L 3/60 = *Disc.* 126-127. 〔『パンセ』(上), 82 頁。〕
- 11) *A Concordance to Pascal's Pensées*, ed. by H. M. Davidson and P. H. Dubé, Cornell U. P., Ithaca et London, 1975. なお、これに加えて、さらに 200 回余りの
「真なる (vrai/e/s)」〔vérité の形容詞形〕の使用を加える必要がある。
- 12) 「パスカルと真理の問い」, または「パスカルと真理の用法」といったテーマ
は、それ自体でシンポジウムのテーマとなるだろう。なお、これを今から
10 数年前に実際にテーマとして取り上げ、「論理学から人間学までの真理」
についての検討を試みた、次の論集がある。*Pascal. Qu'est-ce que la vérité ?*,
dir. par Martine Pécharman, Paris, PUF, 2000.
- 13) この語の使用は, 〔「真理」の頻度に比べて〕格段に少ない。『パスカル『パン
セ』コンコルダンス』によれば, 37 回用いられるが, そこに 30 回程度の
「愛 (amour)」の使用を加える必要がある。
- 14) 例えば, 以下を参照。Jean-Luc Marion, *Sur le prisme métaphysique de Des-
cartes*, Paris, PUF, 1986, §23, pp. 325-342. さらに「物事の三つの秩序」の役
割を論じた, 以下の拙著も参照。*Pascal: des connaissances naturelles à
l'étude de l'homme*, Paris, Vrin, III, I, pp. 179-204.
- 15) L 23/308 et HC 1/933 = *Disc.* 37. 〔『パンセ』(上), 372 頁, 及び『パンセ』
(下), 71 頁。〕
- 16) 『パンセ』においては「愛の秩序が光彩を放つのは, その不在によってであ
る」(これが拙著『パスカルと哲学』(*Pascal et la philosophie*, Paris, PUF, 2^e
éd. 2007) の最後の一文である)と主張しようと, かつての私は考えたが,
この点について批判が寄せられた。この判断を引き続き本質的なものとして
引き受けるとしても, 私は, 「考える手足」(L 26/360-376 = *Disc.* 139-141. な
お, この諸断章の大部分は, 「道德のパンセ」の章として, 1678 年のポー
ル・ロワイヤル版で付加されたものである)というタイトルで取りまとめ
るような諸々の考察全体を, 〔この判断の〕特筆すべき例外として扱うこ
とに吝かではない。とはいえ, この見事な統一的教説のなかに真理概念につ
いての明示的説明を探し求めても徒労に終わるだろう。

- 17) OC III, 390. [『幾何学的精神について』支倉崇晴訳, 『メナール版パスカル全集第1巻』所収, 白水社, 1993年, 394頁。]
- 18) L HC 2/979 = *Disc.* 194. [『パンセ』(下), 177頁。]「キリスト教の徳のうちで最大のもの, 真理への愛が攻撃を受けている」。
- 19) L HC 1/949 (L major 950) = *Disc.* 200. [『パンセ』(下), 85頁。]「私たちは彼らを可能な限り人間的に遇した。それは真理への愛と愛の務めのあいだにあって中庸を保つためであった」。さらに以下も参照。 *Le Sixième Ecrit*, in *Les Provinciales*, éd. Louis Cognet, Paris, Garnier, p. 456. [『パリの司祭たちの第六文書』田辺保訳, 『パスカル著作集V』所収, 教文館, 1983年, 103頁。]
- 20) L XXVII/776 = *Disc.* 158. [『パンセ』(中), 塩川徹也訳, 岩波文庫, 2015年, 461頁。]
- 21) L 13/176 = *Disc.* 158. [『パンセ』(上), 220頁。]
- 22) L XXVI/739 = *Disc.* 158. [『パンセ』(中), 436頁。] エマニュエル・マルティノは, 次のような形で極めて適切に, この断章を〔上記の〕断章 L 776 と断章 L 176 とのあいだに挿入している。「真理がこれほど隠匿され, 虚偽がこれほど確立した現今, 真理は愛することなしには知ることができない。〔以下 L 176〕真理を愛さない者は, [・・・・]。』
- 23) 「真理への愛 (charitas veritatis)」(agapè tès alètheias) という表現は, まさしくパウロの表現である。『テサロニケの信徒への手紙二』2章10節を参照。
- 24) 『ファウストゥス論駁』32章18節:「われわれは, その方(慰め主である聖霊)が, 人間を真理へと至らしめたということをも証明する(『ヨハネによる福音書』16章13節)。なぜなら, 人は愛からでなければ真理に入らないからである。ところで, 使徒曰く, 私たちに与えられた聖霊によって, 神の愛が私たちの心に注がれたのである(『ローマの信徒への手紙』5章5節) (Probamus etiam ipsum [Paraclitum Spiritum Sanctum] inducere in omnem veritatem (Joan. 16, 13) : quia non intratur in veritatem nisi per caritatem : caritas autem Dei diffusa est, ait Apostolus, in cordibus nostris, per Spiritum Sanctum qui datus est nobis (Rom. 5, 5))」(OC, t. 26, Paris, Vivès, 1870, p. 314 ; CSEL 25/1, 780.)。したがって, 聖霊を通じて聖書の理解へと入ることが, パスカルと同様, 「神の事柄」にかかわるとしても(この点については, 以下を参照。Jean-Luc Marion, *Au lieu de soi. L'approche de saint Augustin*, Paris, PUF, 2008, p. 191.), アウグスティヌスによって『ヨハネによる福音書』16章13節(「真理の霊が来ると, あなたがたを導いて真理をことごとく悟れたた(Spiritus veritatis docebit vos omnem veritatem)」)を用いてファウストゥスに突きつけられた証明においてこの文が果たす前提としての役割が, パスカル

によるこの文の用い方とどの点で異なっているかについては理解されるだろう。

- 25) 神の真理は、たとえそれが説き伏せる術であれ快く受け入れる術であれ、その他どんな「方法」であっても「説得術の対象に」おとしめられはしない。「私は、ここでは神の真理については語らない。説得術の対象におとしめたりはしないようにするであろう。というのも、この真理は自然を無限に超えているからだ。つまり、神だけがこの真理を魂のなかに置けるのであって、それも、み心になかった仕方によってである。」(*De l'art de persuader*, OC III, 413. [『説得術について』支倉崇晴訳, 『メナール版パスカル全集第1巻』所収, 白水社, 1993年, 413頁。])
- 26) *De l'art de persuader*, OC III, 414. [『説得術について』, 414頁。]
- 27) 入り方のなかでも「最も自然なのは、知性から入ることである。というのも、人は、証明済みの真理以外のものには、決して同意を与えてはならないからである。だが、最も普通なのは、自然に反するとはいえ、意志から入ることである。というのも、あらゆる人々が、ほぼ (*presque*) 常に、証明ではなくて快さによって信じるように仕向けられているからである」(OC III, 413 [『説得術について』, 413頁])。私はこの「ほぼ」という特筆すべき語に傍点を付しておく。というのも、断章「人間の不釣り合い」におけるかの有名な「ほぼ」という語「事物と精神とを混同する「ほぼすべての哲学者」」と同様、まさにここでもデカルトがこの仕向けからは除外されるように私には思われるからである。この点については以下を参照。*Pascal et la philosophie*, §18, c. この「ほぼ」という語は、もう少し後の箇所でも再び用いられている。「われわれ人間は、実際には、自分たちの気に入ることしかほぼ信じないからである」。意志(愛)から真理に入ることが「最も自然」であるということ、このことを、今度はハイデガーが次のように認めている(*Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, §20, GA 20, 222 [ハイデッガー『時間概念の歴史への序説』常俊宗三郎、嶺秀樹、レオ・デュムペルマン訳、〈ハイデッガー全集〉第20巻、創文社、1988年、205頁])。「アウグスティヌスがただ特殊な連関のなかで、現存在の真に認識するあり方という意味で愛や憎しみと規定するものを、われわれは後に現存在の根源的現象として捉えなければならないであろう」。さらに、Jean-Luc Marion, *Au lieu de soi*, p. 191. 「人ハ愛カラデナケレバ真理ニ入ラナイ (Non intratur in veritatem nisi per caritatem)」についての注釈と、『説得術について』の一節についての注釈とに関しては、同著者による以下を参照。*Au lieu de soi*, §21, p. 183-195. 及び *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, Paris, PUF, 1986, p. 360-363.
- 28) 「自然であるはずだった秩序[・・・]ところが、この秩序を人間は、聖な

- る事柄とすべきものを世俗の事柄と同等に扱ってしまったために損なってしまった」(OC III, 414 [『説得術について』, 414 頁])。
- 29) OC III, 413. [『説得術について』, 413 頁。]
- 30) この点に関してはスピノザと比較できるだろう。スピノザにとって、判断の審級は知性の段階にとどまっている。「[・・・] われわれは、どのような場合にも、ものを善と判断するから、そのものへ努力し、意志〔意欲〕し、あるいは衝動を感じ、あるいは欲求するのではない。むしろ反対に、あるものを善と判断するのは、そもそもわれわれがそれに向かって努力し、意志〔意欲〕し、衝動を感じ、あるいは欲求するからである ([...] nihil nos conari, velle, appetere, neque cupere, quia id bonum esse judicamus ; sed contra nos propterea, aliquid bonum esse, judicare, quia id conamur, volumus, appetimus, atque cupimus)」(*Ethica*, III, prop. IX, scolie, G II, 148, 4-8) [スピノザ『エティカ』工藤喜作・斉藤博訳、中公パックス、1980 年、197 頁]。この立場はアリストテレス (*Métaphysique*, A 7, 1072 a 27-28.) とは反対の立場である。
- 31) パスカルは快く受け入れる術については扱えないと述べていることを確認しておこう。「快く受け入れる術の方は、比べようもなくずっと難しく、捉えにくく、有用で驚くべきものである。したがって、私がこちらのほうを論じないのは、私にその能力がないからである。私は自分の力不足を痛感しているので、私にとっては、そのようなことをするのはまったく不可能だと思っている。だからと言って、論争のためと同じように確実な気に入られるための規則があるとは思わないというのではない [・・・]。だが、私は、そうした規則に辿り着くことができないと思っている。たぶん、私の弱さがそう私に思わせているのだが」(OC III, 416-417 [『説得術について』, 416-417 頁])。
- 32) 「『耳に快いことを語ってください。そうすればあなたの言うことに耳を傾けます』とユダヤ人はモーセに述べていた」。すでにエルネスト・アヴェは、その著作の脚注で以下のように指摘している。「この文言は、パスカルが『出エジプト記』20 章 19 節の一文を解釈しているのではない限り、モーセ五書のなかには見当たらない。ただし、その一文は「パスカルが言うような」意味をもつようには思われぬ」(*Pensées*, Paris, Delagrave, 1866, t. II, p. 297)。なお、この点は「パスカル全集編者である」ジャン・メナールによる注に以下の通り反映されている。「『出エジプト記』20 章 19 節の大胆な読み替え」(OC III, 414 [『説得術について』, 429 頁])。
- 33) OC III, 414. [『説得術について』, 414 頁。] さらに以下の拙著も参照。*Pascal : des connaissances naturelles à l'étude de l'homme*, pp. 216-217. この点について改めて繰り返しておく。回心の秩序がそれ自体で逆説的であることは

- これまで十分指摘されてこなかった。『プロヴァンシアル』第18の手紙では、そのことを神の愛の結果とみなしている。「神は、天上の心地よさを与えて人の心を変えさせ〔・・・〕、他方で人間は、神のうちに最大の喜びがあるのを知って引きつけられ、自分の方から、まったく自由で自発的に愛に促されて動き、間違いなく神のもとへと向かって行くようになる」(*Provinciale*, éd. Cognet, p. 359 [『第18の手紙』田辺保訳, 『パスカル著作集IV』所収, 教文館, 1980年, 216頁])。さらに、『恩寵文書』(OC III, 687)でのアウグスティヌスからの引用も参照。ジャンセニウスがアウグスティヌスの *delectatio* [快楽] に関して犯している誤解については、以下を参照。Henri de Lubac, *Augustinisme et théologie moderne*, Paris, Aubier, 1965, p. 95-96. パスカルはこの誤解を免れているように思われる。この点については以下の拙論を参照。«Subtilité et supposition métaphysiques dans la *Lettre sur la possibilité des commandements* : deux notes cartésiennes», *Quaderni leif*, 13, 2015, pp. 7-21.
- 34) OC III, 414. [『説得術について』, 414頁。]
- 35) OC III, 413. [『説得術について』, 413頁。]
- 36) 人間の墮落は、人間が「聖なる事柄とすべきものを世俗の事柄と同等に扱ってしまった」(OC III, 414 [『説得術について』, 414頁]) 点に存する。
- 37) 「この真理〔神の真理〕が、精神から心のなかではなく、心から精神のなかに入ることを神は望まれた。意志が選び取る事柄の審判者たらしめる理性の働きの傲慢な力をへり下らせるためでもあり、また〔・・・〕病める意志を癒すためでもあると了解している」(OC III, 413 [『説得術について』, 413頁])。
- 38) 「知ラレザルモノヲ欲セズ (Ignoti nulla cupido)」(オウィディウス『恋の技法』III-397)。
- 39) L HC 2/978 = *Disc.* 40-41. [『パンセ』(下), 171頁。] 当該の断章はこの原理を適用し、自己愛と真理への嫌悪、自我への嫌悪と真理への愛とを結びつけて論じている。この点に関しては以下の拙著を参照。Pascal et la philosophie, pp. 335-336.
- 40) L HC 1/926 = *Disc.* 32. [『パンセ』(下), 60頁。] この断章は、『パンセ』原本 (Recueil Original) 85番に記載されているが、ポール・ロワイヤル版にはない。それは、おそらくこの断章が孕む逆説が理由であろう。この断章は、デモレ版 (*Continuation des Mémoires d'histoire et de littérature*, t. V, part. II, Paris, 1728, p. 321) として1728年にはじめて出版された(次に、フォージェール版 (*Pensées*, dans l'éd. Faugère, I, p. 231) として1844年に出版された)。しかしながら、誰もがこの断章に問題を見たわけではない。例えば、ジョゼフ・マレーグの小説『アウグスティヌスあるいは師はそこにいる』の

主人公もそうである。この小説は、主人公のソルボンヌでの先生が当該の断章を断章 L XXIII/300 に引きつけて理解した場面で、次のように描写している。「こうした肉に基づく彼らの見せかけの感情（ユダヤ人のそれ）と真理の偶像崇拜とのあいだに相同を見るのは容易であり、両者のつながりを見るのは難しくない……。それは諸概念を細かく調べることのできる者であれば、誰にでもできてしまうことだ」（*Augustin ou le Maître est là*, Paris, Spes, éd. 1966, p. 251）。

- 41) 例えば、L 5/99 = *Disc.* 71 を参照。「神が真理であることはわかっているのだから」〔『パンセ』(上), 122 頁〕。さらに L 9/140 = *Disc.* 85 〔『パンセ』(上), 177 頁〕も参照。「神が欲することを欲する道へと導くのは、イエス・キリストだけである。道、真理 (*Via veritas*)」。これは『ヨハネによる福音書』14 章 6 節からの引用である。「私は道であり、真理であり、命である (*Ego sum via et veritas et vita*)」。
- 42) L HC 1/84 et 15/199 = *Disc.* 63. 〔『パンセ』(上), 240 頁。〕この点については以下の拙著を参照。*Pascal : des connaissances naturelles à l'étude de l'homme*, I, II.
- 43) Cf. Olivier Boulnois, *Une archéologie du visuel au Moyen Age, V^e-XVI^e siècle*, Paris, Seuil, 2008.
- 44) «Deux clés de la chronologie des discours pascaliens», *XVII^e siècle*, 1994, 4, p. 725.
- 45) この点については以下の拙論を参照。「Admirer l'original : la Cène de Port-Royal de Paris», *Philippe de Champaigne, entre politique et dévotion*, Réunion des musées nationaux, 2007, pp. 51-57. なお、何が^{イマージュ}似像の用法に含まれるかについてもここでは取り上げない。それは、例えば、「ブレーズとジャクリヌから姉ジルベルトへの手紙」（1648 年 4 月 1 日）(OC II, 582-583 〔『メナール版パスカル全集第 1 巻』, 142-146 頁〕)に見られる用法である。
- 46) L 19/275 = *Disc.* 95 ; L XIX/503 = *Disc.* 97. 〔『パンセ』(上), 336 頁, 及び『パンセ』(中), 239 頁。〕自然はそれ自身、神の^{イマージュ}似像である (L HC 1/934 = *Disc.* 32 〔『パンセ』(下), 73 頁〕。さらに下の注も参照。
- 47) L 15/199 = *Disc.* 64. 〔『パンセ』(上), 244 頁。〕
- 48) OC II, 852. 〔『父パスカルの死』飯塚勝久訳, 『メナール版パスカル全集第 1 巻』所収, 185 頁。〕こうした自分自身への慰藉 (*consolation*) の手紙については、以下を参照。Constance Cagnat, *La mort classique. Ecrire la mort sans la littérature française en prose de la seconde moitié du XVII^e siècle*, Paris, Champion, 1995 (特に『父パスカルの死』については p. 72-93)。
- 49) OC II, 853. 〔『父パスカルの死』, 186 頁。〕

- 50) OC II, 854. [『父パスカルの死』, 187 頁。]「パスカルにおける死の扱い」を, 『父パスカルの死』(1651 年), 「灯りのなかの闇」(1654 年), 1659-1660 年病身期という三つの時期(各時期に対応する視点は, 称賛, 償い, 解放である)に即して提示している研究は, 以下の論考が唯一である。Gérard Ferreyrolles, «Mourir avec Pascal», *Travaux de littérature XXV*, «Les écrivains devant la mort», Genève, Droz, 2012, p. 127-138.
- 51) OC II, 856. [『父パスカルの死』, 189 頁。] 以下の引用も同じ頁である。
- 52) 「象る (figurer)」という動詞がここで意味しているのは, 単に自然が身体をそのように表していること, それが身体の見かけであるということだけである。当然ながら『ポール・ロワイヤル講演』(後述参照)で彫琢されるような表徴 (figure) という概念が問題になっているわけではまったくない。
- 53) この表現は『コリントの信徒への手紙一』6 章 19 節に従ったものである(これは編者のジャン・メナールが指示しなかった出典である (OC II, 856))。さらに以下も参照。『コリントの信徒への手紙一』3 章 16 節。
- 54) ここからパスカルは聖遺物への崇敬について説明している (OC II, 857 [『父パスカルの死』, 190 頁])。
- 55) OC II, 857. [『父パスカルの死』, 191 頁。]
- 56) 「これらの真理に注意を払うことによって, [・・・] 間違った感情を正すようにいたしましょう」(OC II, 857 [『父パスカルの死』, 191 頁])。
- 57) 「[・・・] 人間にとってきわめて自然なこうした恐怖の衝動 [・・・]」(OC II, 857 [『父パスカルの死』, 191 頁])。
- 58) パスカルがどのような点でアウグスティヌスと区別されるのか, つまり神への愛という無限の能力については, ここでは横に置こう。なおこの愛は, その後, 無限の自己愛 (amour de soi) として溢れ出ることになる。「それから罪がやってきて, 人間はこれら二つの愛のうち最初のものを失いました。そして, 無限の愛を受け入れることのできるこの偉大な魂のなかに自己自身への愛だけが残ったために, この自己愛 (amour-propre) は, 神への愛が立ち去った空虚のなかに広がり, 溢れ出しました。こうして人間は自分だけを愛し, そして自分のためにすべてを, 言い換ええますと限りなく愛するようになったのです」(OC II, 857-858 [『父パスカルの死』, 191 頁])。この点については以下の拙著を参照。Pascal: des connaissances naturelles à l'étude de l'homme, pp. 75-76.
- 59) たとえモンテーニュが「苦しみと死をも避けようとするのは, 本能的にそうするよう仕向けられるからだ」(L'Entretien de Pascal et Sacy, Courcelle, p. 49, éd. Mengotti-Mesnard, 119 [『サシとの対話』田辺保記, 『パスカル著作集 I』所収, 教文館, 1980 年, 185-186 頁])としても, それは死がモンテーニ

ユにとって自然に恐ろしいものだからではない。「われわれは苦痛は自然に恐れるけれど、死が死であるからといって、恐れはしないという考え方は、信じてもいいのではないか。死は、生と同じく、われわれの存在の本質的な部分をなしている。自然が、われわれに死への憎しみや恐怖を生み出して、どうなるというのか。なぜなら、死は、自然の働きを継続させて、移り変わりをはぐくむのに、きわめて有効な地位を占めているのではないか。この世界において、滅亡や破壊よりも、むしろ、誕生や増加の役割を果たしているのではないか」(Essais, III, 12, éd. Villey, p. 1055 [モンテーニュ『エッセー 7』宮下志朗訳、白水社、2016年、224頁])。では、死への恐怖と腐敗した肉への恐怖とを区別するカントについてはどうだろうか。死が「真の悪」(III, 12, *ibid.* et *Entretien, ibid.* [『エッセー 7』, 212頁、及び『サシとの対話』, 186頁])であるかどうかかわからないとするモンテーニュは、「だらしく軟弱に死ぬことしか考えていない」(L XXV/680 = *Disc.* 148 [『パンセ』(中)、379頁])。

- 60) この一節は死が罪に先立つことを含意しているように思われる。逆のことを示しているのは、『ローマの信徒への手紙』5章12節に基づく信仰箇条であり、それは複数の公会議でも繰り返されている。
- 61) OC II, 858. [『父パスカルの死』, 192頁。] さらに以下も参照。OC II, 854. [『父パスカルの死』, 187頁。] 「イエス・キリストの外にあっては、死は恐ろしいもの、憎むべきものであり、自然の恐怖であります。一方、イエス・キリストのうちにおいては、死はまったく別のものになります。すなわち愛すべきもの、神聖なものであり、信徒の喜びとなるのです」。
- 62) 再度エマニュエル・マルティノによる以下の論考を参照。«*Deux clés de la chronologie des discours pascaliens*», pp. 725-726. 「このような『^{イマージュ}像の』身分が、パスカルから見れば、原理的に^{イマージュ}像を無効にするという見方はわれわれの見方からは程遠い。パスカルは、[・・・] たえず^{イマージュ}図像原理の正当性を認めていたのである。例えば、以上のような『愛について欺く^{イマージュ}像』があるということが反対推論によって示しているのは、正しく解釈された^{イマージュ}像が可能であるということである。パスカルは決してプラトン主義的であるわけではない。「愛に至らないものはすべて^{フィギュール}形象 [である]」からといって、ハンス・ウルス・フォン・バルタザールが言うように、超形象的なもの (*das Ueberfigürliche*)、超像的なもの (*das Ueberbildliche*) が非-図像的であるということには決してならない。パスカルは決してユダヤ的ではない。[・・・] ^{イマージュ}彼が発見したのは、この^{イマージュ}像が^{イマージュ}不純であるということであって、それは^{イマージュ}像が^{イマージュ}比喩だからではなく、逆に^{イマージュ}像が十分に^{イマージュ}比喩ではないからである。以上のことから、次の問いが生じる。すなわち、^{イマージュ}像が純粋な^{イマージュ}比喩像であるためには、

デカルト精神に倣えば、どのような特徴を表していなければならないのか。憚らずに答えよう。それは判明性 (clarté) [非-隠匿性] である」。なお、後の注 (75) も参照。

- 63) これは『国家』10巻の洞窟の影^{イマージュ}像の分析に従ったものである。
- 64) «Deux clés de la chronologie des discours pascaliens», p. 725.
- 65) パスカルが「真の似像〔原像〕」という表現を用いているわけではない。しかしこの表現は、次の『ヘブライ人への手紙』10章1節を引き合いに出すなら容認されるだろう。「律法は将来の善いものの影を有しているのであって、事柄の原像そのものをもっているのではない (Umbram enim habens lex futurorum bonorum, non ipsam imaginem rerum, Σκιάν γὰρ ἔχων ὁ νόμος τῶν μελλόντων ἀγαθῶν, οὐκ αὐτὴν τὴν εἰκόνα τῶν πραγμάτων)」[『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004年、768頁]。
- 66) OC II, 582. [『ブレーズとジャクリヌから姉ジルベルトへの手紙』(1648年4月1日), 144頁。]『対話』では、エピクテトスの『提要』26(21)の戒めに言及している。「日々、死から目を背けることなかれ」(Courcelle, p. 13 ; éd. Mengotti-Mesnard, p. 95)。
- 67) L 16/210 et 211 = Disc. 125, [『パンセ』(上), 270-271頁。] 続く引用も同じ断章からの引用である。
- 68) 「邪欲と力はわれわれのあらゆる行為の源泉である。邪欲が意志的なものを生み出し、力は非意志的なものを生み出す」。
- 69) この表現は、数行前の「装うこと」を受けたものである。形姿〔表象〕(figmentum) が悪い (malum) という言い方の典拠は『創世記』8章21節であり、ヴァターブル訳ラテン語聖書に見られる。「人が心に思う表象は、幼いときから悪いのだ (Figmentum enim humani cordis malum est ab adolescentia sua)」。この点に関しては、ジャン・レルメの指摘がある。Jean Lhermet, *Pascal et la Bible*, Paris, Vrin, 1931, p. 214.
- 70) 「だから君は、〈私〉の不正を憎む人々に対して、〈私〉を好ましいものにすることはできない。好ましいものにできるのは、もはや〈私〉に自分の敵を認めない不正な人間が相手の場合だけだ。こうして君は不正であり続け、不正な人間にしか気に入ってもらえない」(L XXIV/597 = Disc. 39 [『パンセ』(中), 327-328頁])。直前の引用も同じ断章からの引用である。なお、この断章については以下の拙著も参照。*L'invention du moi*, Paris, PUF, 2010, leçon I.
- 71) L 19/275 = Disc. 95. [『パンセ』(上), 336頁。]
- 72) 『コリントの信徒への手紙一』10章11節 [『新約聖書』岩波書店、526頁]、及び『ガラテヤの信徒への手紙』4章24節。

- 73) L 19/270 = *Disc.* 95-96. [『パンセ』(上), 327 頁。]
- 74) L 19/270 = *Disc.* 96. [『パンセ』(上), 327 頁。]
- 75) L XXXII/849 = *Disc.* 61. [『パンセ』(中), 559 頁。]
- 76) ユダヤ人たちは、実在が目の前にあるのにそれを見損なってしまった。「ユダヤ人たちは、表徴的なものをあまりにも愛し、それをあまりにも強く待ち望んだので、実在が予告通りの時期と様態で到来したときに、それを見損なってしまった」(L 19/270 = *Disc.* 96 [『パンセ』(上), 328 頁])。キリストは、すぐれて待ち望まれ予告された者である。しかし、彼が到来したときにはそれと気づかれなかった。「彼らはそれが彼だとは思わなかった」。
- 77) 「神は、これらの事柄をこの民に開示されようとはしなかった。彼らがそれに値しなかったからだ。それでも、それらを信じる手がかりを与えるために予告しておこうとされた。そこで、その時機を判明に (clairement) [隠すことなく] 予告し、ときには事柄自体も判明に、しかし表徴を豊かに用いて表現された。それは、表徴的なものを愛する人々 [ユダヤ人] が表徴にとどまり、表徴となられたものを愛する人々 [キリスト教徒] が、表徴のうちにそれを見るようにするためだった」(L 19/270 = *Disc.* 96. [『パンセ』(上), 327 頁。]) なお強調は引用者。さらに上記注 (59) も参照。
- 78) L 19/270 = *Disc.* 96. [『パンセ』(上), 327-328 頁。] パスカルは次のように続けている。「なぜなら、「必要なものはただ一つ」[『ルカによる福音書』10 章 42 節] だが、私たちは多様性を好むからだ。そして神は、この唯一必要なものに導いてくれる多様性によって双方を満足させられる」。
- 79) L XIX/502 = *Disc.* 97. [『パンセ』(中), 236 頁。] さらに以下も参照。 *Factum pour les curés de Paris*, éd. Cognet des Provinciales, p. 407. [『パリの司祭たちのための弁駁書』田辺保訳, 『パスカル著作集 V』所収, 教文館, 1983 年, 37 頁。]
- 80) L XXIV/615 = *Disc.* 96. [『パンセ』(中), 343 頁。]
- 81) 『ローマの信徒への手紙』1 章 17 節, 及び L HC 1/947 = *Disc.* 32. [『パンセ』(下), 81 頁。] この断章は、以下の断章と同様、ポール・ロワイヤル版では途中で二つに切り離されていたものである。このような形で [一つの断章として] 出版されたのは、デモレ版あるいはフォジュール版によってである。
- 82) 『ローマの信徒への手紙』3 章 31 節, 及び L HC 1/925 = *Disc.* 32. [『パンセ』(下), 59-60 頁。]
- 83) L HC 1/934, *Disc.* 32. [『パンセ』(下), 73 頁。]
- 84) Gaffiot, *Dictionnaire illustré latin français*, s. v., sens II, référence à Virgile, *Ennéades* 6, 755.
- 85) *Lettre de la fin octobre 1656*, OC III, 1035. [『パスカルからロアネーズ嬢への

- 手紙』石川知広訳、『メナール版パスカル全集第2巻』所収、白水社、1994年、328-329頁。〕（強調は引用者。）
- 86) 「私は全面的な隠匿性〔闇〕を愛することができる。しかし、もしも神の思し召しで、不完全な隠匿性の状態に置かれると、そこにあるこのわずかな隠匿性が私の気に触る。また覆いつくす隠匿性のもつ功德がそこには見られないので、それが私には気に入らない」(L HC 1/926=Disc. 32 [『パンセ』(下), 60頁])。なお、今日われわれは、この「わずかな隠匿性」が『『あまりに』わずかな隠匿性』だ、と言うつもりである。
- 87) ジャン＝リュック・マリオンは、偶像的真理を次のような真理として解釈している。すなわち、「自己愛を通じて受け取られた〔真理〕、したがって『叡知を見ようとする心の目から見た』誤解された真理 (vérité faussée)」(*Sur le prisme métaphysique de Descartes, op. cit., p. 362*) である。同様に、ピエール・マニヤールも、「真理に対する誤った関係 (rapport faussée)」について語りながら、偶像を、自己愛による真なるものの偽造として分析している(«On se fait une idole de la vérité même», in *Pascal. Qu'est-ce que la vérité ?*, *op. cit.*, pp. 15-28)。いずれの解釈も、当該の断章を直接、以下の断章と関連づけている。L HC 2/978=Disc. 40-41。[『パンセ』(下), 171-175頁。] それは言い換えれば、自己愛から生じた真理への嫌悪と関連づけることである。このことによって結局、似像概念をめぐるパスカル固有の分析は見誤られることになる。
- 88) L HC 1/926 à L HC 1/935。[『パンセ』(下), 61-62頁。]
- 89) L HC 1/935=Disc. 32。[『パンセ』(下), 73頁。]
- 90) したがって、エマニュエル・マルティノが、『ローマの信徒への手紙』1章20-25節から出発して断章 L 934-5 と 926 とのあいだに見出したつながりは、議論の余地のないものである。
- 91) 『ローマの信徒への手紙』1章21-25節 ([...] *cum cognovissent Deum, non sicut Deum glorificaverunt* [...]. *Et mutaverunt gloriam* [...] *Dei in similitudinem imaginis* [...], *qui commutaverunt veritatem Dei in mendacium*)。
- 92) 以下の断章を言い換えたものである。L HC 1/948=Disc. 32。[『パンセ』(下), 82頁。] (なお、エマニュエル・マルティノはこの断章を今度は以下の断章に結びつけている。L HC 1/926。[『パンセ』(下), 60頁。]) こうしてわれわれは次のように言うことができるだろう。すなわち、われわれの真理は、もしそれがイエス・キリストの真理でないのなら、神の前では忌まわしいものとなる、ということである。
- 93) 厳密に言えば、キリストは、以下の一節によれば、神の唯一の真の似像である。この一節は、『コロサイの信徒への手紙』1章15節 (cf. 『コリントの信

徒への手紙二』4章4節)及び『ヘブライ人への手紙』1章3節に依拠したもので、依然としてパスカルの全著作のなかでただ一度だけ現れる一節である。「あなたの^{イマージュ}似像であり、あなたの本質の刻印である、私の救い主イエス・キリスト」(*Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies*, OC IV, 1002 [『病の善用を神に求める祈り』支倉崇晴訳, 『メナール版パスカル全集第2巻』所収, 431頁]。しかし、ハンス・ウルス・フォン・バルタザールが断章 L XXIV/607 = *Disc. 106* [『パンセ』(中), 338頁]を引用して強調する通り、イエス・キリストは、パスカルにとってもまた「あらゆる^{イマージュ}似像の完成」(*Herrlichkeit*, Bd II, *Fächer der Style*, II, Einsiedeln, Johannes Verlag, 1962, p. 162, trad. franç. R. Givord et H. Bourboulon, *La gloire et la croix*, II, *Styles*, 2, Paris, Aubier-Montaigne, 1972, p. 118)なのである。

解題

本論文は、2020年1月25日(土)同志社大学良心館302教室にて、同志社大学文学部哲学科と東京大学文学部哲学研究室との共催により行われた講演の原稿の翻訳である。この講演は、東京大学の鈴木泉教授が日本学術振興会外国人招聘研究者(短期)制度のプログラム「近世哲学における主観性と形而上学の関係に関する系譜学的・体系的研究」のもとで実施した、一連のキャロー教授来日講演・セミナーの最終回にあたる。講演当日は、鈴木教授の司会のもと、約3時間にわたってフランス語による講演と通訳を介した聴衆との質疑応答が行われた。著者のヴァンサン・キャロー氏(Vincent Carraud)は、現在ソルボンヌ大学教授とともに、同大学デカルト研究センター長をつとめ、これまでに *Pascal et la philosophie* (PUF, 1992) や *Causa sive ratio. La raison de la cause, de Suarez à Leibniz* (PUF, 2002) をはじめとする画期的な研究成果を通じて17世紀哲学史研究を世界的に主導してきた研究者である。

本論文は、パスカルにおける真理と愛との関係を描き出すことを主題とする。この問題が複雑な解釈を要するのは、真理をめぐって、一方で「私たちは愛を通してはじめて真理に入る」とされながら、他方で「私たちは真理でさえ偶像にになってしまう」という言葉が、パスカルによって残されているからである。この真理との逆説的關係において「愛」がもつ意味を明らかにするのが本論文の課題だろう。その際に注目されるのが、真理を *image* とみなす定義である。フランス語の *image* は、似像、写し、姿、像、比喩、表象、偶像といった意味をもつ、きわめて多義的な語であり、翻訳に際してはルビを付したうえで文脈に応じて訳し分けた。いずれにも共通するのは、その背後に現象しない(見えない)「實在」が想定され、*image* はその現象態であるという点である。この点に基づいて、4つの現象態が区別される。① *fausse image*, ② *image fausse*, ③ *vraie image*, ④ *im-*

age vraie である。①は実在をその通りに表さずに人目を欺く現象態、②は①が実在と似ていると誤解した結果、実在を覆い隠してしまう現象態、③は実在をその通りに表すと同時に、実在そのものでもある現象態、④は①を実在に正しく結びつけた結果、実在を顕にする現象態をそれぞれ意味する。①と②・④との違いは、前者が「意志」あるいは自然の原理に基づくのに対して、後者は「知性」あるいは判断の原理に基づく点である。また②と④の判断の違いは、前者が自分だけで判断するのに対して、後者は神の秩序に基づいて判断する点に存する。

こうした多様な現象態が生じる理由は、前半部で説明される原罪にある。この原罪ゆえに見えない実在は、①として表に現れる。それは比喩的性格を備え、実在と結びつけるには判断（解釈）が必要とされる。この判断の規準を転倒した自然の秩序ではなく、神の秩序、つまりは愛に求めて image を解釈するなら、その真理（④）は実在＝神へと向かう。これが「私たちは愛を通してはじめて真理に入る」の意味である。それに対して判断の基準を自分に求めて image を解釈したとき、実在は隠されたままの②にとどまる。ここで重要な点は、可視的な image を見える通りに解釈した真理だけでなく、image の可視性（判明性）を過小評価して純粋な不可視性（隠匿性）だけを神とみなす真理もまた、退けられる点にある。それを神の似像と誤解するなら、この錯誤こそパスカルが「偶像」と呼ぶものである。これが「私たちは真理でさえ偶像にしてしまう」の意味である。実在との直接的関係を真理とみなす短絡は偶像崇拜へ帰着する。原罪後の人間は、神が与えた image の比喩的性格を払拭することはできず、倒錯した自然の image に対する不断の解釈や知解を通じて媒介的に実在と関わるほかない。この逆説を体現するのが③、すなわちキリストであり、おそらくここに著者は原罪論に裏打ちされた image 概念の本義を見ていると思われる。

この解釈によって示されるのは、パスカルにおける真理と愛の関係が、神の両義的な現象態をめぐって構想されていることである。神の現象態が両義的なのは、それが純粋な「隠匿性」ではなく、「判明性」（非隠匿性）と「隠匿性」という不可分の対立契機を同時に備えているからである。image＝真理とは、まさにこの両者の共属性（等根源性）を一語で表した（すぐれてハイデガー的な）概念といえるだろう。この点を本論文は、ハイデガー『存在と時間』の仏訳者であるマルティノによって編集された『パンセ』に依拠しつつ、驚くほど精緻な文献読解によって論証している。

なお、講演原稿はすでに以下の媒体において、まずはハンガリー語訳で公表され、次にフランス語のオリジナル版が出版された。ただし、講演原稿はこれらのテキストから加筆修正されており、翻訳は講演原稿に拠った。

〈ハンガリー語版〉「Igazság a szereteten kívül», Különbőség (Budapest), 2015, 1 (Blaise Pascal – a szeretet bölcsessége), pp. 15-35. [PDF 版]

〈フランス語版〉«La vérité hors de la charité», in *La sagesse de l'amour chez Pascal*, éd. par H. Michon et T. Pavlovits, Paris, L'Harmattan, 2016, pp. 13-38.

翻訳に際しては、読みやすさを考慮し、原稿にはない改行を行った箇所がある。またパスカルからの引用については、例えば L 7/131 で、『パンセ』ラフェュマ版ファイル 7／断章番号 131 を表し、既訳を参照した場合、訳文には適宜変更を加えた。[] は著者による補足, [] は訳者による補足である。